

年度	受領者	1988	大野木 和 敏 銘 刈 眞 正
1984	柴 山 元 彦		金 城 勝 重 橋 本 雅 巳
1985	中 田 隆 一 水 野 量	1989	松 本 崇 司 松 田 耕 治
	名 越 利 幸		塩 澤 定 道 有 賀 公 平
1986	大 奈 健 江 上 公		西 銘 宜 正
	半 田 孝 瀧 島 幸 市	1990	横 田 寛 伸 松 村 哲
1987	入 田 央 三 品 博	1991	榎 野 泰 夫 浅 野 浅 春
	榊 原 保 志		岡 田 哲 也 居 島 修



花岡 利昌 著
「伝統民家の生態学」

海青社 1991年6月初版
199頁 定価 2,600円

一風変わった名前の本である。「伝統民家」はなんとなくわかるような気もするが、その「生態学」とはなんだろう。著者の「まえがき」と「あとがき」でその意味を述べておられる。すなわち、「現在の住宅生産は次第に規格化され、その住宅を自然環境から隔絶して、専らエネルギーを使用することにより内部環境を調整する方向に力を注いでいる」「先人が、自然と対決するのではなく風土と調和して行く道を築いた生活の知恵を明らかにする意味であえて生態学なる言葉を使用した」とある。このことは今流に言えば「地球にやさしい家の構造を調査し、その住環境を明らかにする」と言うことになろうか。

花岡氏が取り上げている「伝統民家」は、大家族制で有名な岐阜県大野郡白川村の合掌造り、石川県石川郡白峰村の大壁造り、古墳時代の遺構を残すと言われている奄美諸島の中の離島に分棟民家、同じく登呂遺跡などから出土したのと似た構造を持つ奄美大島の高倉、当時の沖縄の貴族の住居を模したと言われている石垣島の宮良殿内、島根県の防風林つき屋敷、山形、新潟、滋賀三県の土座、アイヌ民族のチセなどなど国指定文化財を含め合計25家屋以上におよんでおり、氏の精力的な活動が偲ばれる。

方法論としては、気温、湿度、気流速度、放射などを必要に応じ連続記録をとったり、また定時での読み取り記録によったりそれぞれの家屋の特性、観測時の技術的問題によりそれぞれ適切な方法をとっている。これら一連の調査は数年で出来るものでなく、著者は約25年と述

べているがその期間中のこの方面の技術的進歩は目ざましく、著者の採用した方法もそれに従って近代的に変化してきているのは当然である。

しかし、先にも述べたような特徴ある伝統民家は現在ではえてして交通不便な僻地にあることが多く、輸送その他の問題からであろう、測定器の方も伝統的なものが多く使用されている。だからと言って、著者の考察は最新式の測器を使用した結果の考察に決して劣るものではない。興味ある一例を挙げよう。合掌造りの場合、一般に夏涼しくて春には暖かいと言われている。著者はその事を記録温度計を使用して事実であることを確かめ、さらに、ほぼ南北方向に統一されている棟の向きと屋根の急勾配とがあいまって、屋根の単位面積が一日の間に受ける日射量が夏に一年中で最も少なく、春と秋とに極大値を示すことを、実測と理論の両面から見事に実証している。

蛇足を加えたいのだが、この合掌造りの構造について著者は、「屋根の棟の方位が南北から大きく外れていたのは最近に観光用に移築したもの」と皮肉たっぷりに述べている。恐らく著者は「先人の知恵」を忘れてしまった、または気が付いていない現代人を哀れに思ったのに違いない。

合掌造りの他にも、伝統家屋と近代家屋との同時比較は、沖縄のかの有名な宮良殿内と最近に建造されたコンクリートブロック造りの民宿などについても行われ、興味ある結果を提供している。

この本は、図、表、写真が豊富なのも読者の理解を助けているし、資料集としての意義も認められる。住居気候の学徒はもとより、建築、保健、文化人類学その他広く地球に優しい環境に関心のある方々に一読をお奨めしたい。

(岡山大学教育学部 佐橋 謙)